

の日々を過ごす。抛り所としていた鉄幹は主催していた「明星」を廃刊にする。唯一元気の良かったのは晶子であった。与謝野家を切り盛りし、小説を書いていた。もともと晶子の「みだれ髪」から文学的出発をした啄木である。もう一度再浮上するために晶子的世界に接近する。その中で蕪村の受容と晶子の愛読していた源氏物語の読書があることを具体的に指摘した。

又、蕪村の句集読後につくった歌の「愁ひ来て／丘にのぼれば／名も知らぬ鳥啄めり赤き茨の実」が、蕪村の「愁ひつつ岡にのぼれば花いばら」との類似性は従来から指摘されているが、これ以外にも10首程の啄木短歌に影響が考えられる様を具体的に指摘した。しかし、脱俗的な蕪村と「生活」「社会」に目覚めてゆく啄木との間に段々距離が生じてゆく様もあり、それも指摘した。

2、「尹東柱と石川啄木」明治大学教養論集286号
韓国の国民詩人尹東柱（ユン・ドンジュ）と日本の国民詩人啄木は共に27歳という早すぎる人生を閉じた。昭和期と明治期という相違はあるが、共に閉塞した時代に生き、日本帝国の権力を批判的に作品化した。そしてその作品は「青春の詩」という点で共通している。

まず日本ではまだまだ知られていない東柱の生涯を紹介し、その上で作品の比較検討をした。具体的にはツルゲーネフの受容をめぐる、易しく分かりやすい詩をめぐる、「夜」と「朝」をめぐる等等である。

石川啄木と日本古典文学

池田 功

A Study of Takuboku ISHIKAWA.

Isao IKEDA

昨年度の研究成果は以下の通りである。

1、「啄木と蕪村－晶子・子規との関係を通して－」
明治大学人文科学研究所紀要第39冊に掲載。

啄木が与謝蕪村にのめり込んだ時が明治41年8月にある。「蕪村の句集」を買求め、感動したことを日記に記し、又、すばらしさを手紙に書いて「推薦」している。この蕪村受容を与謝野晶子・正岡子規との関係から考察し、又、啄木短歌に蕪村の影響を考察したのが本論である。

江戸時代まで画家として知られていた蕪村を俳句の面で評価したのは子規、つまり根岸派であった。その影響を受けて晶子も又、蕪村の愛読者となる。

明治41年4月に北海道から上京した啄木は、金田一京助の世話になりつつ小説を書くが失敗し、白虐